

第1章 はじめに

東京からまいりました。小学校の教師をしております。今日は『阿弥陀経』についてお話ししたいと思ってやって来ました。私の勝手な解釈もあるでしょうけど、私なりに勉強したこと的一端をお話しできたらなと思います。よろしく願いいたします。

(1) 『浄土三部経』とは？

浄土真宗には三つの大切なお経があります。『ぶつせつむりようじゆきよう 仏説無量寿経』、『ぶつせつかんむりようじゆきよう 仏説観無量寿経』、そして『ぶつせつあみだきよう 仏説阿弥陀経』です。この三つのお経を『じょうどさんぶきよう 浄土三部経』というお経があるわけじゃないんですね。『だいきよう 無量寿経』を「大経」、『かんぎよう 観無量寿経』を「観経」、『しょうきよう 阿弥陀経』を「しょうきよう 小経」と略することもあります。

お釈迦さまは対機説法といって、相手に応じて教を説かれました。みんないろんなことで悩んでいますね。お金のことで悩んだり、健康のことが気になったり、いろんな悩みがあります。一人ひとり悩みが違うので、お釈迦さまはその人に合わせて説法されました。たとえば、子供を亡くしたキサゴータミという女性です。

死んだ子供を抱えたキサゴータミは、道行く人たちに「この子を生き返らせてください」と頼みます。でも、もう死んでしまってるんですから、どうすることもできません。すると、ある人が「お釈迦さまのところに行ってごらん」と勧めたので、キサゴータミはお釈迦さまに「この子を生き返らせてください」とお願いするんですね。そしたらお釈迦さまは「ケン粒を一粒もらってきなさい。ただし、今まで葬式を出したことのない家からでないといけない」と言います。喜んだキサゴータミは一軒一軒と訪ねますが、どの家でも誰かが亡くなっていました。そして、家族がどのように死んだのか、どういう気持ちでいるかをキサゴータミに語ります。何人もの人の話を聞いているうちに、キサゴータミはふと気がついた。大切な人を失って悲しんでいるのは自分だけではなかった、死別の悲嘆は誰もが同じだと。

このように、一人ひとりに応じて説かれる対機説法がお釈迦さまの説法の基本です。さまざまな悩みに苦しむ人々に対して、相手やそのときの状況に応じて教を説かれたので、仏教には八万四千の法門ほうもんと言われるような多くの教があるわけです。中には矛盾するようなことも説かれています。

日本にはいろんな宗派がありますね。どうしていろんな宗派があるのかというと、お釈迦さまが本当に説こうとされたのはどのお経なのか、どのお経が一番大切なのか、人によって考えが違うということから、多くの宗派が分かれたわけです。

それで、各宗派はそれぞれよりどころとなる経典が異なるんです。よりどころとなる経典を「しよえ 所依の経典」と言います。親鸞聖人を宗祖とする浄土真宗は『浄土三部経』です。そして親鸞聖人は、お釈迦さまの教の一番中心は『無量寿経』だと言われました。なぜかという、『無量寿経』には「阿弥陀仏の物語」が説かれているからです。こんな物語です。

ある国の王様が世自在王せじざいおうぶつ 仏の話聞いて、自分も仏になろうと思います。どういう国を作

ろうかと考え、二百一十億の仏国土を見て、五劫というあいだ考え、四十八の願い（本願）を立て、法蔵菩薩ほうぞうぼさつと名のります。そして、兆載永劫ちようさいようこうという長い時間をかけて修行し、本願を成就（完成）して極楽浄土という国を作り、阿弥陀仏とよばれました。

これは経典に説かれた物語であって、実際にあったことじゃないし、阿弥陀仏はお釈迦さまのような実在した人物ではないんですね。経典の中に登場する仏です。お釈迦さまが「阿弥陀仏の物語」で何を伝えようとされたのかを考えないといけません。

阿弥陀仏の四十八の願いの中でもっとも大切な願いは、第十八願（至心信楽ししんしんぎょうの願、念仏往生の願）です。浄土に生まれたいと願って「南無阿弥陀仏」と称える衆生は必ず往生させようという誓いです。「撰取不捨せんしゆふしや」、つまりどんな衆生も決して見捨てない、必ず救いとげようということが阿弥陀仏の本願です。

では、阿弥陀仏の本願は誰を救うためのものなのか。どんな人を救うのか。それを説いているのが『観無量寿経』です。阿弥陀仏の本願は凡夫、すなわち煩惱を抱えて苦悩する人間が目当てです。

『阿弥陀経』では、お釈迦さまが祇園精舎ぎおんしやうじやで弟子たちに説法されます。まず、極楽浄土のありさまや阿弥陀仏の名のいわれを説き、阿弥陀仏や極楽の功德を讃えます。そして、極楽に生まれたいという願いを起こすべきである、極楽に生まれるには一心に念仏せよと勧めます。次に、東南西北上下の六方世界の諸仏（さまざまな仏）も阿弥陀仏の功德を讃え、阿弥陀仏を信じる者を護っていると説かれ、そして私（お釈迦さま）も、諸仏から信じるのが難しい教を説いていることを讃えられていると話されて、お釈迦さまの説法は終わります。お釈迦さまも諸仏の一人です。

この三つのお経がセットになって、阿弥陀仏の本願の教えが説かれているんです。

（2）『阿弥陀経』の特徴

『阿弥陀経』は他のお経と違うところがあります。ほとんどのお経は、誰かがお釈迦さまに尋ね、それにお釈迦さまが答えていくという形になっているんです。『無量寿経』では、弟子の阿難あなんや弥勒菩薩みろくぼさつの問いに対して答えています。『観無量寿経』は、マガダ国の王妃である韋提希いだいけの問いに対して答えるという形式で書かれています。

『観無量寿経』の最初に「王舎城の悲劇おうしやじょう」が書かれてあります。マガダ国の首都が王舎城です。阿闍世あじやせという王子が父親の頻婆娑羅王びんぼしやらおうを牢屋に閉じ込めて殺してしまうんです。幽閉された母親の韋提希がお釈迦さまに「どうしてこんなことになったのでしょうか」と訴えるところから、『観無量寿経』は始まります。韋提希はお釈迦さまの教えに導かれ、阿弥陀仏の浄土を願うようになります。

ところが『阿弥陀経』では、対告衆たいごうしゆう（説法する相手のこと）からの問いかけがありません。誰も尋ねないのに、お釈迦さまが智慧第一といわれる舍利弗しゃりほつという弟子に話しかけます。そのために「無問自説経むもんじせつきやう」（誰も問わないのに自分から説いたお経）といわれています。

私たちも、聞いてもらいたいことや、どうしても伝えたいことがあれば、誰か尋ねてくれないかなと思いますよね。相手が聞きたいと思っていなくても、話したければ自分から話し

始めます。『阿弥陀経』も、お釈迦さまに「これだけは伝えたい」という思いがあったからこそ、質問されてもいないのに自分から説き始めたんです。お釈迦さまがこのことだけはぜひ伝えたいと思われた、それが『阿弥陀経』です。

第2章 『阿弥陀経』の教え

経典は「序分」「正宗分」「流通分」の三部で構成されています。「序分」は、このお経はどこで説かれ、誰が聞いていたかといった、お経の説かれた経緯が書かれています。「正宗分」はお経の本文で、教えが説かれた部分です。「流通分」は締めくくりです。『阿弥陀経』もその三つに分かれているんです。

『阿弥陀経』のすべての文章を説明するわけにもいきませんので、私が大切だと思ったところをお話ししたいと思います。

(1) 経典とは？

仏説阿弥陀経 姚秦の三蔵法師鳩摩羅什、詔を奉りて訳す
(仏説阿弥陀経 姚秦の三蔵法師である鳩摩羅什が訳した)

お経はすべて『仏説〇〇経』と、「仏説」という言葉がついているんです。この「仏」とはお釈迦さまのことです。お経はお釈迦さまの教えが説かれてあるということです。

お釈迦さまが亡くなり、みんなが嘆き悲しんでいるときに、ある弟子が「うるさいことを言う人がいなくなったんだから悲しむことはない。これからは欲することをし、欲しないことをしなければいい」と言ったのを耳にした摩訶迦葉という弟子は、弟子たちがそれぞれ違ったことをお釈迦さまの教えだと言ってたら、争いが起き、僧伽（教団）はバラバラになってしまう、そんなことにならないよう、お釈迦さまの教えをまとめる必要を感じ、「みんなでのお釈迦さまの教えをまとめよう」と提案しました。これを「結集」といいます。

弟子が集まり、教えを阿難が、律は優波離が責任者となって、まず「お釈迦さまはこのように説かれました」とみんなに話します。それに対して、「私はこのように聞いた」と言う人もいて、そこで話し合いをし、全員が納得してできたのがお経なんです。阿難はお釈迦さまのいとこです。いつもお釈迦さまのそばにいてお世話をする秘書役でしたから、お釈迦さまのお話はすべて聞いていたんです。

みなさん、お経というと、文字で書かれたものだと思うでしょう。しかし、最初のころはお釈迦さまの教えを文字に書き写すことはせず、すべて暗記してたんです。口伝によって継承されてきました。教えを文字で書き記すようになったのは、お釈迦さまの死後三百年から四百年たった紀元前1世紀ごろだと言われています。

もともと、『浄土三部経』や『法華経』、『般若経』といった大乘経典は、お釈迦さまが実際に説かれたわけじゃないんですね。紀元0年前後に大乘仏教の運動が起こり、お釈迦さまに仮託して多くの経典が作られました。『阿弥陀経』もその一つで、一世紀ごろに北インドで成立したと推定されています。そして、サンスクリット語で書かれた経典が中国に伝えられて翻訳され、それから日本に伝わってきたんです。

『阿弥陀経』は中国の姚秦（前秦）という国で、鳩摩羅什という三蔵法師が402年に訳し

ました。「三蔵法師」というと、孫悟空の『西遊記』に出てくる玄奘げんじょうのことだと思われていますが、大勢いるんですよ。「三蔵」とは経律論のことで、お経と戒律とお経の注釈である論に精通している僧侶が三蔵法師です。

(2) 『阿弥陀経』が説かれた場所

かくのごとき、我聞きたまえき。一時、仏、舎衛国しやえこくの祇樹給孤独園ぎじゅぎつこどくおんにましまして、
(私はこのように仏の教えを聞きました。あるとき、お釈迦さまが舎衛国しやえこくの祇樹給孤独園どくおんにおられました)

お経は「如是我聞」という言葉で始まります。「このように私は聞きました」ということです。「我」とは阿難のことですけど、私自身のことでもあります。お経どくじゆを読誦することは死んだ人への供養のためではありません。お経を読むことによって仏さまが説かれた教えを私が聞くんです。

そして、お経の冒頭には、いつ、誰が、どこで、誰に教えを説いたかということが書かれてあります。「一時仏」ですから、あるとき、仏（お釈迦さま）が舎衛国の祇樹給孤独園（祇園精舎）で説かれたのが『阿弥陀経』です。

当時、北インドではマガダ国とコーサラ国が二大大国でした。舎衛国はそのコーサラ国の首都として栄えたところですよ。『平家物語』の冒頭に「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす」とある祇園精舎は舎衛城にあったんです。もともと、祇園精舎には鐘がなかったそうですが。沙羅双樹さらそうじゆとは、お釈迦さまがその下で亡くなった沙羅の樹のことです。

「精舎しょうじや」とは「ヴィハーラ」の訳で、僧院のことです。仏教系の終末医療機関をヴィハーラといいますが、本来は雨安居うあんごの場所です。遊行ゆぎょうといつて、お釈迦さまたちはあちこちを旅しながら仏道修行をし、教えを説いていました。しかし、インドには雨季があつて、大雨が降って歩けなくなることもあるんです。それに、水の中の生き物を踏んでしまうかもしれないので、殺生をしないように、雨季の三か月から四か月の間、お釈迦さまさんがの僧伽（教団）は一か所にとどまって説法を聞き、修行をしていました。これを雨安居といいますが。精舎は祇園精舎以外にも、マガダ国の頻婆娑羅王びんばしやらおうが伽藍がらんを建立した竹林精舎などがあります。

「祇樹給孤独園ぎじゅぎつこどくおん」とは、「祇陀太子ぎだの林を買った給孤独ぎつこどくの園」という意味で、略して「祇園精舎」です。身寄りのない人を憐れんで食事を施していた須達多すだつたという富豪がいました。孤独な人に食べ物を給したことから、「給孤独」という愛称がついていました。

篤く仏教に帰依した給孤独は、お釈迦さまが雨季を過ごせる精舎を布施しようと、土地を探していました。祇陀太子が所有する林がいいと思い、「林を譲ってほしい」と祇陀太子に頼んだところ、祇陀太子は「土地に金貨を敷きつめたら、その分だけ売ってやろう」と冗談で答えたんですね。そしたら、祇孤独が広大な土地に金貨を敷きつめ始めたので、驚いた祇陀太子は喜んで土地を譲りました。その土地に建てられたのが祇樹給孤独園ぎじゅぎつこどくおん、すなわち祇園精舎です。

給孤独はお釈迦さまに祇園精舎を布施したわけです。布施とは布を施すことじゃなくて、「布」は「ひろく」とか「あまねく」という意味ですから、布施とは「ひろく施す」ということなんです。布施には法施（法、すなわち教えを施すこと）と、財施（物やお金を施すこと）、そして無畏施（不安や恐れを取り除くこと）の三つがあります。

我々が人にもものをあげると、感謝してもらおうといった見返りを求めますね。「ありがたい一言もない」と気を悪くしたりします。でも、それじゃ布施とは言えないんです。托鉢をしているお坊さんに食べ物あげても、お坊さんはお礼を言ったり頭を下げたりはしません。見返りを求める気持ちでは布施をしたことにならないし、お坊さんが「すみませんね」とぺこぺこするんじゃ布施をいただいたことにならないんです。

人からものをもらったときにお礼を言うのは道德です。道德と宗教とは違うんです。道德とは善いか悪いかです。でも、何が善いことで何が悪いことなのか、時代や場所、その時の状況によって違ってきますよね。善いことをしようと思っても、結果的に人を傷つけることだってありますし。だからといって、悪いことをしたから救われられないということはない。そこが道德と宗教の違いなんです。

この祇園精舎で『阿弥陀経』の説法が始まりました。

（3）『阿弥陀経』を聞いた人たち

大比丘衆千二百五十人と俱なりき。みなこれ大阿羅漢なり。衆に知識せられたり。

（略）かくのごときらのもろもろの大弟子、ならびにもろもろの菩薩摩訶薩、（略）無量の諸天・大衆と俱なりき。

（千二百五十人のお弟子たちが一緒でした。お弟子たちは皆、徳の高い阿羅漢で、世間によく知られた修行僧でした（略）。多くの弟子たち、ならびに大勢の菩薩たち（略）、そして天の神たちもいました）

煩惱を滅してさとった人が「阿羅漢」です。仏教の言葉はインドの言葉をそのまま漢字に当てはめたものが多いんですが、阿羅漢もそうで、中国語では「応供」と訳されています。

「供養を受けるにふさわしい人」という意味です。「供養」とはサンスクリット語の「プージャー」で、もともとは「尊敬」という意味なんです。尊敬し、大切にすることが、花や食べ物などを差し出すという具体的な形、行動となって表現されるのが供養ということです。

「菩薩」は、「菩薩摩訶薩」を省略した言葉です。これまたインドの言葉を漢字に音写したもので、意味は「さとりを求める衆生」ということです。ただ単に自分が仏になればいいということじゃなくて、すべての衆生の救いを求める存在が菩薩なんです。考えてみれば当たり前のことで、私たちは一人で生きているわけじゃないですよ。すべての存在と関わり合っています。ですから、苦しんでいる人がいるのに、自分だけが救われるということはありません。菩薩は文殊菩薩や観音菩薩が有名ですけど、文殊や観音は実在の人物じゃないんですね。仏の智慧や慈悲という面を表しているんです。

阿羅漢の位にある弟子たち、そして菩薩や天人たちが『阿弥陀経』の説法の際におられま

した。ここまでが序分です。

(4) 西方とは？

仏、長老舍利弗しやりほつに告げたまわく、「これより西方に、十万億の仏土を過ぎて、世界あり、名づけて極楽いと曰う。

(お釈迦さまは長老の舍利弗しやりほつに告げられました。

「ここから西へ十万億もの仏たちの国土を過ぎたところに、極楽と名づけられた世界がある)

舍利弗はお釈迦さまの弟子の中で「智慧第一」と言われてました。お釈迦さまは舍利弗に語り始められます。お釈迦さまの説かれた話を文字通りに理解すれば、西の方角に極楽という世界があるということになります。しかし、地球は丸いですから、ずっと西に行くと元に戻ってしまいますよね。極楽が西にあるというのは物語として説かれたんであって、それを実体化してしまうのは間違いです。どこか西にそういう場所があるわけではないんですね。

極楽を実際にどこかにある実体的な場所と受け止めてしまうと、極楽に往生するのは死んだ後の話になってしまいます。お釈迦さまは死後の世界を説いているんじゃないんです。お釈迦さまは「死んだらどうなるか」「死後の世界があるかどうか」という質問には答えていません。「あなたは今をどう生きるのか」ということを問うのが仏教だからなんです。死んでからどうなるかではなくて、「今」を問題にするんです。そこをはき違えてしまうと、仏教は死んでからの教えだと誤解することになります。死んだら極楽に生まれるということで終わってしまうと、今を生きる教えにはなりません。

では、西方に極楽があるとはどういうことなのかというと、彼岸の中日には太陽は真西に沈みますね。太陽は東から昇って、西に沈む。それを人間の一生として表せば、生まれ、死んでいく。つまり、西とは人生の終着点である死を指しているんです。それで、昔の人は太陽が沈むところに死者の国があると考えました。西に極楽浄土がある、ご先祖さまは西方の浄土にいるんだと思い、それで彼岸には墓参りに行くようになったんです。私たちは太陽の沈む方向(死)に向かって生きています。西に極楽浄土があると説かれることは、阿弥陀仏の本願しょうじは生死(輪廻)を超える道だということを示しているんです。

そして、浄土は十万億の仏土を過ぎたところにあると説かれています。十万億の仏土とは何か、そのことはいろんなふうに取り受けることができると思うんです。

神仏に受験合格や病気平癒とかをお願いしますね。私も真宗の教えを聞くようになるまではそうだったんです。私の父はタクシーの運転手をしていたので、川崎大師によくお参りしてました。神仏にすがってお願い事をするという、そういう弱さを私たちは持っています。私たちの弱い心はいろんな神仏に目が向いて、あちこちにふらふらしています。

あるいは、十万億の仏土とは聖道門しょうどうもんの仏道を表していると考えられます。自力で修行をしていく道が聖道門です。自分の力で道を切り開き、問題を解決しようと努力します。それは大切なことなんですけど、どこかで行き詰まってしまう。しかし、仏の教えを聞くこ

とによって、自分が凡夫であるという自覚を持つようになると、何をよりどころにして生きたいのか、阿弥陀仏の本願しか本当のよりどころはない、ということに気づいていきます。

つまり、どのように生きるか、生きていく方向ですね、それが「西方」という言葉によって示されているわけなんです。凡夫ですから、時には失敗したり迷ったりするわけですが、生きていく方向がはっきりしていれば、迷っていても迷いっぱなしということはありません。どこに向かって歩いていけばいいかがはっきりしていると、あちこちに寄り道しては迷いながらも、安心して生きていけます。

私たちはいろんな人と出会い、さまざまな出来事を経験しますね。うれしいことや楽しいことばかりではなく、つらいことや「何でこんな目に」と思うこともしばしばあります。十億の仏土を超えたところに極楽浄土があるということは、そういうさまざまな苦勞をしたり、失敗を何度もしては後悔する中で、いろんな出会いや出来事のすべては私が阿弥陀仏の本願に出会うための機縁だったんだな、どんな人も、どんな体験もすべて大切だ、といただけるようになることを示していると思います。

(5) 阿弥陀仏とは？

その土に仏まします、阿弥陀と号す。いま現にましまして法を説きたまう。

(その極楽浄土には阿弥陀仏という仏がおられ、今、現に教えを説いておられる)

「南無阿弥陀仏」とはどういう意味かご存じですか。サンスクリット語の音写ですから、字をいくら見ても意味はわかりません。『正信偈』の一番最初に「帰命無量寿如来 南無不可思議光」とあります。どちらも「南無阿弥陀仏」を別の言い方で訳した言葉なんです。

「南無」はインドの言葉の「ナマス」を漢字に音写した言葉です。中国の言葉に翻訳したのが「帰命」ですから、「南無」と「帰命」とはもともとと同じ意味なんです。「帰命」とは、身を投げ出して帰依することです。「帰依」とは「よりどころとする」「すがる」「頼りにする」という意味ですけど、ただ信じるというより、「全身を投げ出してたのむ」という意味なんだそうです。

「命」は、「いのち」ではなく、「命令」ということです。「帰命」とは「本願招喚の勅命」だと親鸞聖人は言われます。「阿弥陀仏をたのめ(南無阿弥陀仏)」という呼びかけに、「私は阿弥陀仏をたのみます(南無阿弥陀仏)」と応えたのが、お念仏を称えるということなんです。

「阿弥陀」とはインドの言葉では「アミターバ」「アミターユス」で、それを漢字に当てはめたのが「阿弥陀」です。阿弥陀の「弥陀」はメートルやメーターと語源が同じで、「量る」という意味です。「阿」は打ち消しの言葉ですから、阿弥陀とは「無量」、つまり「量ることができない」という意味になるんです。何を量ることができないかということ、光と寿です。阿弥陀仏という名前は、阿弥陀仏の光明無量、寿命無量という二つの徳が示されているわけです。それで「阿弥陀」を「無量寿」「不可思議光」「無碍光」などと訳されているんです。「光明無量、寿命無量」ということについては後ほど説明します。

「仏」とは、「ブツダ」を音写した「仏陀」を略した言葉で、中国語では「覚者」です。道理に目覚めた人、さとりを開いた人が仏陀です。そして、自分がさとした教えを人々に伝えて救っていくのが仏さまのお仕事なんです。

「阿弥陀仏」と「阿弥陀如来」は違うのかと聞かれることがあるんですけど、同じです。ただし、「仏」と「如来」とは方向が違うんです。「仏」とは、衆生がさとして仏になるわけですから、「衆生から仏へ」という、私が仏になっていく方向です。

「如来」は「真如（真実）より来たる」という意味なんです。私たち衆生への真実からはたらきですから、「仏から衆生へ」という方向になります。仏さまがさまざまな形で私たちに教えを説いている。それが如来というはたらきです。

仏のはたらきとはどういうことかという、たとえば仏像には座像が多いですけど、これはさとの座に座っていることを意味します。ところが、真宗の本尊である阿弥陀仏像は立っている姿ですね。立像なのは、衆生を済度する（救う）ために立ち上がるという仏のはたらきを表しているんです。

それとか、仏壇に花を供えるときに、仏像にではなく、我々のほうに向けてお供えしますね。あれも同じことで、花は仏からはたらきかけということだからなんです。花や灯明は智慧や慈悲といった仏の徳を表しています。

阿弥陀仏は今現在も説法されていると説かれていることですけど、どこかに極楽があつて、死んだらそこに生まれ、阿弥陀さんがいて、阿弥陀さんの話を聞くということじゃないんですね。「今」とは何年何月何日という「今」ではなくて、私が教えを聞いている「今」です。みなさんがこうしてお寺に参って話を聞くといったことだけじゃなくて、何か問いを持ちながら生活していると、ふと「ああ、そうだったな」と気づきを与えられることがありますよね。私が耳をすませば、いつでも、どこでも、仏さまの教えを聞くことができるということが、今、阿弥陀仏が説法されているということだと思っんです。でも、私に教えを聞こうという気がなければ、教えは耳に入ってこないんです。

教えを聞くということは、これでいいということはありません。死ぬまで聞きつづけないといけないんです。どうしてかという、聞いたことは忘れるからです。しばらくすると、「何だったかな」となります。子供たちに何か身につけさせるためには、五百回も同じことを聞かせないといけないと言われていました。一年は三六五日ですから、たとえば「手を洗いなさい」ということを毎日言えば身につくわけです。

私は僧侶の資格はあるんですけど、本職は小学校の教師なので、袈裟をつけることがあまりなく、住職さんに五条袈裟の威儀というヒモの結び方を何度も教えてもらっては、また忘れてしまうんです。そんなときに住職さんが「人間は忘れるものです。そうしたらもう一度尋ねたらいいんです」と言ってくれました。忘れてもくり返し学んでいけばいいんです。

（6）極楽とは？

舍利弗、かの土を何のゆえぞ名づけて極楽とする。その国の衆生、もろもろの苦あることなし、但もろもろの楽を受く、かるがゆえに極楽と名づく。

(舎利弗よ、その国土をなぜ極楽と名づけるのかというと、その国の人々は何の苦しみもなく、さまざまな楽しみだけがあるから極楽というのである)

「極楽浄土」の「浄土」とは、仏さまの清浄な国土のことです。菩薩は「こういう国を建てたい」という願いを起こします。その願いが完成した国土が浄土なんです。薬師如来の浄瑠璃浄土、釈迦如来の^{りょうぜん}靈山浄土、観音菩薩の^{ふだらく}補陀楽浄土など、さまざまな浄土があります。阿弥陀仏の浄土が極楽浄土です。普通、浄土というと、極楽浄土のことを指します。

極楽にはいろんな苦しみがなく、さまざまな楽しみが与えられると説かれています。といっても、「楽」とは煩惱丸出しで与えられる快樂じゃないんですね。『往生要集』に、浄土に生まれた者には十楽(十の楽しみ)があると書かれています。たとえば「見仏聞法楽」は、阿弥陀仏を見て、その説法を聞くという楽しみです。話を聞いて、今まで腑に落ちなかったことがすっとわかるということがありますね。そういう楽しみのことです。

仏法がなぜ説かれるかということ、^{ぼつくよらく}抜苦与楽のためです。苦を抜いて楽を与えることが教えの根本です。それはなぜかということ、生きるということは苦しみだからなんです。お釈迦さまは「^{いつさいかいく}一切皆苦」と説かれました。すべてが苦しみであるということが仏教の出発点です。

苦の代表が「四苦八苦」です。「四苦」とは「^{しょうろうびょうし}生老病死」です。なぜ生まれることが苦しみなのか。生まれたことで苦しみが始まるからです。死にたくなくても、生まれたら必ず死ななければならない。それが人間の定めです。老いることや病気をすることもそうですね。年を取ると、今まで当たり前できていたことが一つずつできなくなっていくます。私にしても、老眼で見えにくくなったし、歯が抜けて入れ歯にしたり。それはどうすることもできない。私の知り合いがガンになって抗ガン剤治療をしていますが、体重が二十キロ減ったそうです。いつどういう病気になるかわかりません。年を取るとは避けることができません。そして、必ず死んでいくんです。

生老病死の四苦に「^{あいべつりく}愛別離苦」「^{おんぞうえく}怨憎会苦」「^{ぐふとつく}求不得苦」「^{ごうんじょうく}五蘊盛苦」の四つを加えた苦しみを八苦といいます。

「愛別離苦」は、愛する人と別れなければならない苦しみです。別れは死別に限りませんよね。失恋がそうだし、卒業、退職、引っ越しなどで親しい人と別れることもそうです。

それから「怨憎会苦」、会いたくない人に会う苦しみ。憎い人に会ってしまう。嫌な上司とか、自分とウマが合わない人と会うのは苦です。

「求不得苦」は、ほしいものが手に入らない苦しみ。「あれもほしい。これもほしい」と思っています。家がほしいとか、車があればとか。ものや金だけでなく、健康や地位や名誉もほしい。だけど、手に入れたくても手に入らない。

最後は「五蘊盛苦」です。私の体と心が思うようにならない。仕事をしないといけないのに眠くて仕方ないとか、お酒をやめようと思ってもやめられないとか、そういった本能的な欲求を抑えられない苦しみです。

四苦八苦をまとめていうと、自分の思うようにならないということだと思っんですね。苦は人間として生きていくかぎり避けることはできません。楽しみだってあるじゃないかと言

われるでしょうけど、その楽しみは苦の裏返しなんです。いくら大好きな食べ物でも、毎日そればかり食べていたら苦になるでしょう。それに、楽しみはいつまでも続くわけじゃありません。「祭りの後の寂しさ」という言葉があるように、楽しみもいつかは失います。天は楽の世界ですけど、天から去る苦しみは地獄の苦しみよりもつらいと説かれています。

だったら、煩惱がなければ苦が生じないからいいかということ、そうでもないと思うんですね。「わかっちゃいるけどやめられない」という歌があります。自分じゃどうすることもできない。だからといって、「どうせできないんだから」と開き直ってあきらめるわけでもない。つき合いたくない人がいても、なんとかつき合っていく中で、いろんなことを学ぶこともあるじゃないですか。悩むからこそ救いを求め、そこで教えられることだってあります。煩惱はなくならないけど、煩惱に振りまわされるんじゃないでなくて、煩惱に苦しみながらも、道を求めていく。そんなところに人間として生まれた意義があると思います。

(7) 極楽の莊嚴

また舍利弗、極楽国土には七重の欄楯・七重の羅網・七重の行樹あり。みなこれ四宝をもって、周帀し圍繞せり。このゆえにかの国を、名づけて極楽と曰う。

また舍利弗、極楽国土には、七宝の池あり。八功德水その中に充滿せり。池の底にもっぱら金沙をもって地に布けり。四辺に階道あり、金・銀・瑠璃・玻璃、合成せり。上に樓閣あり、また金・銀・瑠璃・玻璃・磤磤・赤珠・碼磧をもってして、これを嚴飾せり。

(また舍利弗よ、極楽国土には七重の欄楯(玉垣)と七重の羅網(網飾り)と七重の行樹(並木)がある。これらはみな四宝(金・銀・瑠璃・水晶)でできていて、国土の至るところにある。このためにその国を極楽と名づけるのである。

また舍利弗よ、極楽には七つの宝でできた池がある。池には八功德水がたたえられ、池の底には金の砂が敷きつめられている。池の四辺には階段があり、金・銀・瑠璃・玻璃(水晶)でできている。上には樓閣があり、これも金・銀・瑠璃・水晶・磤磤(シャコ貝)・赤珠(赤珊瑚)・碼磧の七宝で飾られている)

『阿弥陀経』には「功德莊嚴」という言葉が何度も出てきます。「莊嚴」とは飾ることで、「功德莊嚴」は、仏の功德が目に見える色や形として表現されているということなんです。極楽浄土はどういうところか、どのように莊嚴されているかが、正宗分の前半にくり返し説かれているわけです。

極楽には、四つの宝でできた七重の垣、網飾り、並木があります。また、七つの宝でできた池があり、底には金の砂が敷きつめられ、池の四辺には階段があって、これも四つの宝でできています。池の上には七つの宝で飾られた樓閣があります。これが極楽の莊嚴だと説かれています。お寺の本堂や皆さんの家のお内仏(仏壇)はこうした浄土の莊嚴を表しているんですね。これは実際にそんな場所があるということじゃありません。たとえです。こうしたたとえで何を説こうとされたのかです。

たとえば、「七重」ということだと、「七」は六道を超えた数ろくどうを表しているんですね。「六道」とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天という六つの迷いの世界です。六道がどこかにあるという話ではなくて、人間の心が生み出す世界のことなんですね。弔辞で「あなたは天国に行かれましたね」と言う人がいますけど、仏教では天も迷いの世界です。「七」という数字は、六道を超えた世界が極楽浄土だということを表しているんです。

お釈迦さまが生まれたとき、七歩歩いて「天上天下唯我独尊」とおっしゃったという伝説がありますが、この「七歩」ということも「六道を超えた」ということなんです。「唯我独尊」というと、自分だけがえらいということだと思われるかもしれませんが、そういう意味じゃないんですね。「私はこの世に一人しかいない大切な存在だ」という喜びの言葉です。もちろん、自分だけが大切だということではなくて、どんな人も同じようかけがえのない存在だということと、「唯我独尊」という言葉で表しているわけです。

池の中の蓮華、大きさは車輪のごとし。青き色には青き光、黄なる色には黄なる光、赤き色には赤き光、白き色には白き光あり。みみようこうけつ微妙香潔なり。舍利弗、極楽国土には、かくのごときの功德莊嚴を成就せり。

(池の中の蓮華は、大きさは車輪のようで、青い蓮華は青い光を、黄色い蓮華は黄色い光を、赤い蓮華は赤い光を、白い蓮華は白い光を放って輝き、香りはかぐわしい。舍利弗よ、このように極楽は阿弥陀仏の功德による莊嚴が完成されている)

そして、浄土では、池の中に車輪ほどの大きな蓮華が咲いていて、青い蓮華は青い光を、黄色い蓮華は黄色い光を、赤い蓮華は赤い光を、白い蓮華は白い光を放っているとあるんですけど、このことは「唯我独尊」と同じことを意味していると思うんです。

蓮華とは何を表しているか。蓮華は汚い泥の中にしか生えませんが、泥の中で美しい花を咲かせ、しかも泥には染まりません。泥とは、煩惱のことですし、後に出てきますけど、私たちが生活している五濁ごじよくの世界ということでもあります。仏さまは煩惱にまみれた迷い世界にあって、しかも流されることはない。汚れた泥の中から大輪の花を開花させる蓮華は、さとりさとりの境地に達することの象徴なんですよ。

話は変わりますが、スマップの「世界に一つだけの花」という歌がありますね。

花屋の店先にならんだ いろんな花を見ていた
ひとそれぞれ好みはあるけど どれもみんなきれいだね
この中で誰が一番なんて 争うこともしないで
バケツの中 誇らしげに しゃんとむねをはっている
ナンバーワンにならなくてもいい もともと特別なオンリーワン

これは槇原敬之さんが作った歌です。彼が覚醒剤所持で捕まったとき、『阿弥陀経』に出会ったそうなんです。槇原さんは常にナンバーワンでなければならないと思っていた。一番ということは有頂天、つまり天の世界です。頂上の次は落ちていくしかないんです。新しい曲を期待されてつらくなり、それで覚醒剤によって悩みをまぎらわそうとした。

だけど、『阿弥陀経』に「青色青光 赤色赤光」、青い色の蓮華は青い光を放ち、赤い色の蓮華は赤い色の光を放つとあります。蓮華の色は一つ一つ違って、しかもそれぞれがそれぞれのよさをもって光を放って咲いている。青い蓮華は青い光を放てばいい。赤い蓮華は赤いままでいい。槇原さんは、自分は自分のままでいいんだという『阿弥陀経』の教えによって助けられ、それでこの歌を作ったという話があるんです。

みんながかけがえのない大切な存在で、勉強できる子がいれば、勉強できない子もいる。足の速い子がいれば、足の遅い子もいる。それぞれが違って、みんな輝いている存在なんだ。そのことを蓮華の色によって表しているんですね。比べることのできない唯一の大切な存在であること。これが「天上天下 唯我独尊」ということなんです。

また次に、舍利弗、かの国には常に種類の奇妙雑色の鳥あり。白鵠・孔雀・鸚鵡・舍利・迦陵頻伽・共命の鳥なり。このもろもろの衆鳥、昼夜六時に和雅の声を出だす。その音、五根・五力・七菩提分・八聖道分、かくのごときらの法を演暢す。その土の衆生、この声を聞きおわりて、みなことごとく仏を念じ、法を念じ、僧を念ず。(略) その仏国土には、なお三悪道の名なし。何にいわんや実にこのもろもろの衆鳥あらんや。みなこれ阿弥陀仏、法音をして宣流せしめんと欲して、変化して作したまうところなり。舍利弗、かの仏国土には、微風、もろもろの宝の行樹および宝の羅網を吹き動かすに、微妙の音を出だす。たとえば百千種の楽の同時に俱に作すがごとし。この音を聞く者、みな自然に念仏・念法・念僧の心を生ず。舍利弗、その仏国土には、かくのごときの功德莊嚴を成就せり。

(また次に舍利弗よ、阿弥陀仏の国には常に色とりどりの鳥がいる。白鵠(鶴の一種)・孔雀・鸚鵡・舍利(九官鳥に類する鳥)・迦陵頻伽(雀に似た鳥)・共命の鳥(キジの一種で、一つの身体に二つの頭がある鳥)である。これらの鳥は、昼と夜に三度ずつ優雅な声でさえずる。その鳴き声は五根、五力、七菩提分、八聖道分という教えを説いている。だから、阿弥陀仏の国の人々は、鳥の鳴き声を聞き終わると、誰もが仏を敬い、法(教え)を敬い、僧伽(教団)を敬うのである(略)。

阿弥陀仏の浄土には地獄・餓鬼・畜生という三悪道の名すらない。それならばどうして畜生の姿をした鳥がいるのだろうか。それは、阿弥陀仏が教えを広めようとして、これらの鳥に形を変えて現れたのである。

舍利弗よ、阿弥陀仏の国土にはさわやかな風が吹きわたり、数々の宝の並木や、宝の網飾りを吹き動かして、妙なる音を出している。百千種もの楽器が同時に演奏されているようである。この音楽を聞く者は誰もが自然に仏を念じ、法を念じ、僧伽を念

じる心を生ずる。舍利弗よ、極楽はこのような阿弥陀仏のはたらきが形として美しく飾られている)

音に関する荘厳もあります。極楽国土ではさまざまな音楽が奏でられています。いろんな鳥がさえずっています。風が吹くと、いろんな宝で飾られた並木や網飾りが優しく吹き動かされて、妙なる音を奏で、まるでたくさんの楽器の演奏のように聞こえます。それらの音や鳥の鳴き声は仏の教えを説いており、それを聞く者は、仏法僧の三宝を敬うことを念ずるようになることと書かれています。つまり、極楽とは、私が仏になる世界であって、そのためには仏の教えを聞かなければいけないということです。もっとも、実際の孔雀やオウムはそんなにいい声じゃないんですけどね。

(8) 光明無量、寿命無量

かの仏を何のゆえぞ阿弥陀と号する。舍利弗、かの仏の光明、無量にして、十方の国を照らすに、障碍しやうげするところなし。このゆえに号して阿弥陀とす。また舍利弗、かの仏の寿命にんみんおよびその人民も、無量無辺阿僧祇劫あそうぎこうなり、かるがゆえに阿弥陀と名づく。

(なぜ阿弥陀という名前なのだろうか。舍利弗よ、阿弥陀仏の光明には限りがなく、十方の国々を照らして何ものにもさまたげられないから、阿弥陀仏と名づけられるのである。また舍利弗よ、阿弥陀仏の寿命と極楽浄土の人々の寿命も限りがない。このために阿弥陀仏と名づけられるのである)

お釈迦さまは「どうして阿弥陀仏という名なのか」と問います。「阿弥陀」とは「無量」という意味なんだと、先ほどお話しましたが、何が無量なのか。阿弥陀仏は「光明」と「寿命」が無量なんです。「光明」とは空間を表します。「寿命」とは時間です。「光明無量、寿命無量」ですから、「いつでも、どこでも、誰にでも」ということです。阿弥陀仏の救いはいつの時代でも、どういう場所でも、どんな人でも漏らすことがないということです。

光といっても、太陽や電灯の光みたいなものじゃないんですね。仏さまの智慧は光にたとえられます。阿弥陀仏は「無碍光如来」とも言われるんですけど、十方の国を妨げなく照らすとされます。あらゆるところ、たとえば世の中の問題や矛盾、私の心の中も照らし出すんです。私たちは不安や怖れを抱きながら生きています。いうならば、真っ暗闇の中にいながら、そのことにも気づいていない状態にいるんですね。人間、嫌なことは隠すし、無意識に見ないようにしてごまかします。

しかし、「お天道様が見ている」という言葉があるように、隠しているつもりでも、仏さまの光に照らされると、自分自身がはっと気づく。「いけないことをしたな」とか、「困っている人を見捨てているな」とか。自分や他人をごまかしたつもりでいても、仏さまはごまかせません。仏さまの光は我が身の事実を照らし出してくださるんです。そして、私がどのように生きてらいいのか明らかになる。

そして、寿命ということですけど、阿弥陀仏の寿命も浄土の人々の寿命も限りがないとあ

ります。といっても、死んでも死なない、永遠に生きるということではないんです。寿命というと、私たちは長いか短いかの尺度で量りますね。「三歳で死んだ。かわいそうに」とか「百歳だから大往生だった」と、命を長いか短いかで量り、善いとか悪いとか言いますよね。しかし、命は長さじゃないでしょ。時間の長短では量ることのできない命の尊厳を問題にしてるんです。

「一寸の虫にも五分の魂」という言葉がありますね。夏になると、うるさくまとわりつく蚊をパチンと叩きます。パチンとやられた蚊の命も、パチンとやった人間の命も、命の重さという点では同じなんです。どっちが大切かということでもない。命の重さは量ることができません。そこに蚊と人間の差別はない。それが「寿命無量」ということだと思えます。人間の勝手なはからいで量って、あれはいい、これはだめとレッテルを貼りますが、どんな存在にも平等に与えられているのが命です。

そのことをわかっていても、やっぱり私たちは蚊を殺しますよね。そんなこと当たり前じゃないかと思われるでしょうけど、殺される蚊にとっては迷惑な話です。蚊だって死にたくないでしょうし。つまり、「命は等しく大切だ」と言いながら、「自分さえよければ他人はどうなってもいい」という本性が人間にはあるんですね。そこに気づかせていただくことが阿弥陀さまの智慧であり、慈悲です。

(9) 俱会一处の世界

舍利弗、衆生聞かん者、^ま ^さ ^{おこ} 应当に願を発しかの国に生まれんと願ずべし。^ゆ ^え ^い ^{かん} 所以は何。かくのごときの諸上善人と俱に^と ^い ^つ ^し ^よ ^え 一处に会することを得ればなり。舍利弗、少善根福德の因縁をもって、かの国に生まるることを得べからず。

(舍利弗よ、私が説くことを聞いた者は、必ず極楽に生まれたいという願いを起こしてほしい。なぜなら、多くのすぐれた善き人たちと共に一处に集うことができるからである。しかし舍利弗よ、少しの善根や福德を自分の力で積むだけでは極楽に生まれることはできない)

極楽浄土では、多くの上善人と共に会うことができます。そのことを「^く ^え ^い ^つ ^し ^よ 俱会一处」といいます。しかし、すぐれた人や自分の好きな人だけしか浄土に往生できないんだということじゃないんです。どんな人をも上善人として大切にすることなんです。あの人は好きだから死んでもまた会いたいけど、この人はお断り、という自分勝手な話じゃないんですね。

そして、自力の善行を積むといった少善根の福德では浄土に生まれることはできません。ちょっと修行したり、功德を積んだぐらいじゃだめなんです。どうしてかというと、人間がどのように努力しても、それは少しの善根にすぎないからなんです。私の努力には、そこに「自分が」というはからいの心が必ずあります。「どうだ、すごいだろう」とか「これだけががんばってるんだ」といった気持ちです。だから、いくらがんばったつもりでも少善根なんです。

菩薩が仏になるためには、^{さんだいあそうぎこう}三大阿僧祇劫という、永遠とも言えるほどの長い時間をかけて修行をしないとイケないとされてるんです。それはどうしてかということ、いくら修行をしても、「自分が」という心がどうしても残るからだと思います。しかし、阿弥陀仏の本願にまかせるといふ形ではからいから離れ、心に極楽浄土が開かれたなら、仏になる位に至ることができます。そのことを^{しょうじょうじゆ}正定聚とか不退転といいます。

(10) 諸仏の讃嘆

舍利弗、我この利を見るがゆえに、この言を説く。もし衆生ありてこの説を聞かん者は、^{まさ} 応当に願を^{おこ}発しかの国土に生ずべし。

(舍利弗よ、私はこのような利益があることを知っているから、こうして説いているのである。この教えを聞いた人は、ぜひ極楽浄土に生まれたいと願うがよい)

お釈迦さまは「阿弥陀仏の浄土に生まれたいと願ってほしい」と勧めてくださっています。このように勧めているのはお釈迦さまだけではありません。さまざまな仏さま(諸仏)も阿弥陀仏や極楽浄土のことをほめたたえているんです。

舍利弗、我がいま阿弥陀仏の不可思議の功德を讃歎するがごとく、東方に、また、阿閼鞞^{ごがしやしゆ}仏・須弥相仏・大須弥仏・須弥光仏・妙音^{ぜつそう}仏、かくのごときらの恒河沙数の諸^{おほ}仏ましまして、おのおのその国にして、広長の舌相を出だして、遍く三千大千世界に覆^{おほ}いて、誠実の言を説きたまう。汝等衆生、当にこの不可思議の功德を称讚する一切諸仏に護念せらるる経を信ずべし。

(舍利弗よ、私が今、阿弥陀仏の不可思議な功德をほめたたえているように、東方の世界でも、阿閼鞞^{ごがしやしゆ}仏・須弥相仏・大須弥仏・須弥光仏・妙音^{ぜつそう}仏など、ガンジス河の砂の数ほどの多くの仏がおられ、それぞれの仏が、それぞれの世界で広く弁舌をふるい、世界の隅々にまで届くように誠実な言葉で、「すべての衆生よ、阿弥陀仏の不可思議な功德を称讚している一切の諸仏がお護りくださる教えを信じなさい」と勧めておられる)

『阿弥陀経』には六方段といって、いろんな仏さまの名前が出てくるところがあります。東南西北上下の六方の世界の仏さまがみんな口をそろえて、「阿弥陀仏の極楽浄土はすばらしいところだ。教えを信じ、ぜひ浄土に生まれたいと願ってほしい」と勧めてくださっていると説かれています。

すべての諸仏が阿弥陀仏をほめたたえるということは、極楽が西方十万億土の向こうにあると説かれていることにつながるように思うんです。私たちは願いを叶えるためにあちこちのお寺や神社にお参りしては、家内安全とか交通安全とかを願いますね。そういうふうにあれこれと迷ったり、いろんなことがあつたりして人生遍歴する中で、お金や地位、名誉といったことじゃ救われないことに気づきます。そのことに気づいたならば、親鸞聖人やご先祖

の方たちといった多くの方は「阿弥陀仏の本願によって生きてほしい」と勧めてくださって
いた諸仏だったんだなと気づく。それが諸仏の称讃ということじゃないかと思えます。そし
て、念仏を勧めてくれた人たちを仏さまとして「ありがとう」「ごめんなさい」と手を合わせ
るわけです。

(11) お釈迦さまへの称讃

舍利弗、我がいま諸仏の不可思議の功徳を称讃するごとく、かの諸仏等も、また、我
が不可思議の功徳を称説して、この言ごんを作なさく、「釈迦牟尼仏よじんなんけうじな、能く甚難希有の事を為
して、能く娑婆国土ごじよくあくせの五濁悪世、劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁の中にして、
阿耨多羅三藐三菩提あのくたらさんみやくさんぼだいを得て、もろもろの衆生のために、この一切世間に信じ難き法を
説きたまう」と。舍利弗まさ、当まさに知るべし。我五濁悪世あのくたらさんみやくさんぼだいにして、この難事なんしんを行じて、
阿耨多羅三藐三菩提あのくたらさんみやくさんぼだいを得て、一切世間のために、この難信なんしんの法を説く。これをはなは
だ難かたしとす。」

(舍利弗よ、私(お釈迦さま)が今、仏たちの不可思議な功徳をほめたたえているよ
うに、その仏たちもまた、私の不可思議な功徳をほめたたえ、このように言われる。
「釈迦牟尼仏は世にもまれな難しいことを成しとげられた。娑婆世界ごじよくの五濁、すなわ
ち劫濁こうじよく(時代の濁り)、見濁けんじよく(思想の乱れ)、煩惱濁ぼんのうじよく(盛んな煩惱)、衆生濁しゆじようじよく(衆生の資
質の低下)みようじよく、命濁(中途での挫折)という五種の濁りの中にあつて、釈迦牟尼仏は無上
のさとりを得て、人々には信じるのが難しい教えを、人々のためによく説かれたも
のだ」と。

舍利弗よ、よく知るがいい。私は五つの濁りに満ちた世界で、苦勞を重ね、さと
りを開いて仏となった。そして、すべての衆生のために、信じることの難しい阿弥陀仏
の教えを説いた。このことはまことに難しいことだった」)

最後に、お釈迦さまがなぜ『阿弥陀経』を説かれたかということが説明されます。お釈
さまがこの世に生まれてきて、さとりを開いて仏になったのは、阿弥陀仏の浄土の教えを五
濁悪世の衆生に知らせるためなんです。このことを「出世本懐しゅつせほんがいの」と言います。

お釈迦さまは「阿弥陀仏の本願をたのんでほしい」と勧められます。そして、十方の諸
仏は「お釈迦さまの説かれたことは正しい」と証明し、ほめたたえます。このように、仏の世
界はお互いがお互いをほめあう世界なんです。それに対して、地獄はお互いが軽蔑しあう世
界です。ですから、私たちもお互いがほめあい、尊敬しあい、大切にしあうなら、そこには
極楽浄土が開かれるんです。

ただし、私たちには「自分が」という我執の心があるから、仏さまの教えを疑う気持ちが
起こり、まかせることができない。それで、「我が身に執着する衆生に阿弥陀仏の本願を伝え
ることは難中の難」なんです。私たちは楽しいことのほうがいいし、人を憎むこともあるし、
人を裏切ることもあるし、将来が不安になることもあります。それが凡夫なんです。だから、
「念仏を称えたぐらいでいいんだろうか」という疑いの心を持ちます。私たち凡夫は念仏の

教えを聞いてもうなずけない。それで、「信じるのが難しい教えだ」とお釈迦さまは言われるわけです。

でも、『歎異抄』の九章に、唯円という親鸞聖人の弟子が「念仏を称えても躍り上がるほどの喜びはありません。また、早く浄土に往生したいとは思えません。死ぬよりもこの世のほうがいいです」と言ったら、親鸞聖人は「私もそうなんですよ」と答えたとあります。念仏を称えても喜ぶ気持ちが起きないのは、私たちに執着の心があるからだ。しかし、煩惱の凡夫を救おうというのが阿弥陀仏の本願だから、おまかせすることによって往生は定まる。だから、安心して生きていけばいい。このように親鸞聖人は唯円に説明されます。

(12) おしまい

仏、この経を説きたまうことを已りて、舎利弗^{おわ}およびもろもろの比丘^{びく}、一切世間の天・人・阿修羅等、仏の所説を聞きたまえて、歡喜し、信受して、礼を作して去りにき。
(お釈迦さまがこの経を説き終えると、舎利弗や多くの比丘、天・人・阿修羅などは、お釈迦さまの説かれた教えを聞いて、歡喜し、信受して、礼拝をして去っていかれました)

ここが流通分です。こうして『阿弥陀経』の説法は終わりました。私の話もこれで終わります。どうもありがとうございました。

(2014年3月28日・29日に行われた春彼岸会でのお話に加筆したものです)